

# 高知の女性の生活史ができるまで ～3年間の活動をふりかえって～



## はじめに

平成17年12月27日、財団法人こうち男女共同参画社会づくり財団において、「高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない」を発行いたしました。

「高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない」は、戦前から戦後の激動期を生きてきた高知の80歳以上の女性88人の生活を記録した聞き書きと、各界でご自身の道を切り拓き、力強く人生を歩んでこられた女性16人からの寄稿、女性をめぐる高知の近現代史と年表で構成されており、学術的にも高い評価を受けました。

このような高い評価を受けられたこの本の制作には、たくさんの関係者の並々ならぬ尽力がありました。

このたび、この本の制作過程や制作に携わっていただいた方々の体験談をとりまとめ、今後のこうした活動の一助とするための冊子を作成いたしました。

また、その冊子には、昨年7月から財団法人高知市文化振興事業団発行の冊子「文化高知」に連載された「高知女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあないはこうしてできた」への寄稿文もあわせて掲載いたしております。

みなさまにご一読いただき、ご活用いただければ幸いです。

平成19年3月

こうち男女共同参画社会づくり財団  
理事長 速瀬 愛子

## 女性史完成によせて

高知の女性の生活史作成実行委員会 委員長 今井清子

「高知の女性の生活史ひとくちに話せる人生じゃあない」を手にした時、嬉しい！と同時に3年間の様々な思い出が頭の中を巡りました。「無から有を創り出す」「遠い記憶を呼び起こし正しく記録する」という大変困難な作業は、平成15年7月第1回の実行委員会から始まりました。その都度起きる様々な問題も委員の皆さんの熱意で解決し、編集委員会、ブロック会議、聞き取りと度重なるうち、幻は次第に姿を現しそして今ここに在る！私の胸に熱いものがこみあげていつしか本田路津子さんの「私の小さな手」を口ずさんでいました。「私の小さな手、何も出来ないけどそれでもみんなの手と手を合わせれば何か出来る。何か出来る」・・・ずっしりと手応えのあるこの女性の生活史は200人近いボランティアの方々が女性史を作るという一つの目的に向かって手を合わせたから完成したのですね。関わったみなさんに大きな喜びと希望を与えてくれたことでしょう。

平成15年6月、思いがけずソーレから「高知の女性史を作りたいのでご協力を」と要請があった時、「ああ、高知には女性史が無かったんだ」。過去30年婦人問題に関わりながらその機会が無かった事を改めて思い知らされ、是非関わらせて貰いたいと思いました。が、当時私は重度の認知症の母を介護していましたので、「出来る範囲でお手伝いさせていただきます」とお受けしました。それから3ヶ月後、母は105歳の生涯を閉じました。まるで「私の介護はもうえい。ソーレのお手伝いをしなさいや」というように私は受け止めました。母の写真にこの本を見せながら「お母さんの思いもこの中に込められているのよね」と報告しました。また、私にとっても母を亡くした悲しみから速やかに立ち上がらせてくれたのもこの本だったので。忘れることのできない思い出です。

この女性の生活史は評判がよく約1ヶ月で完売し、その後2度増刷しました。「読みやすい」「一気に読んだ」等嬉しい声を聞きます。また昨年3月には「第16回高知出版学術賞」を受賞するという栄誉に輝きました。

男女不平等の時代にたくましく生きた先輩たちの生きざまや願いを収めたこの本が、「男女平等」から「男女同労」の時代を生きる方々への良き「かけ橋」になることを念じています。



## 聞き取りをやり終えて、今想うこと

### ◆◇ 生き生きと働く人たち

室戸・安芸ブロック 小林和香

聞き取りをした人を選ぶとき、山、海、里、町、それぞれの地域の普通の人を選ぶよう気をつけた。そのため、聞き取った話はその地域の70～80年前の庶民の生活史として有意義だと感じたものの、とりたててドラマがあるわけではない。

たとえば、安芸平野では戦前二期作が盛んだったが、やがて温床栽培へと変わっていく。養蚕も盛んで、忙しい時には家中、蚕だらけだった。知識として知ってはいたが、そのために一家総出で働いたことを直に聞くと、村の暮らしがよみがえって楽しかった。「女の人生」を聞くことよりも、生き生きと暮らした人たちの話に興味があり、この本の編集方針からずれていたかなと、後に聞き取りをまとめるときに、反省もした。

また、聞き取りをした人本人ではないが、縁者の人の話で興味深い話があった。女は男を陰で支えることが多かったが、逆に生け花師範をしていた女性を夫や息子たちが支えていた話は、男女の役割や立場について思いこみをしてはいけない、と思った。

同じように、近代日本を支えた製糸産業は、「ああ野麦峠」などで女工哀史のイメージが強い。しかし安芸地方では、製糸工場で働くことは、周辺の山間の子女にとって、自立への第一歩であった。尋常小学校を終わったものの、進学などままならない女の子にとって、近隣の農村での子守奉公や町での女中奉公と比べると、技術が習得できる製糸はあこがれの職場ともいえた。当時の安芸や奈半利には先進的な製糸工場あり、自立の意欲に燃えていた女の姿が見える。

また江戸時代から、安芸地方の浦々は炭や材木の供給地として大阪との結びつきが強いが、大阪や神戸に奉公に行っていた女性の多さに、結びつきの深さをより強く感じた。陸上交通路の整備が遅れていた土佐東部では、高知へ行くよりも、船で大阪に行く方が近く感じたのかもしれない。とはいうものの、今以上に都会と田舎の暮らしの差は大きく、都会での奉公は気苦労が絶えなかったことだろう。

山でも里でも、普通の暮らしの中で、懸命に働く女や男の姿が心に残った聞き取りだった。

## ◆◇「今だから話せることもある～モニターと通訳付きでヒアリング」

香美ブロック 溝渕栄子

原稿依頼の文書をいただき、改めてヒアリングしたときのことを思い出していた。

女性生活史作成の話があり、ソーレ運営委員として大坪さんと一緒に担当することになり、実行委員会が結成された。その中で、80歳以上の女性を対象に聞き取り調査をしてその内容をまとめるということが決まっただけで、その内容については未定であった。

そこで、親しくして頂いている明治生まれ方と大正生まれの伯母にモニターヒアリングをお願いし、幼いころの遊びや小学校時代のこと、青春時代、結婚から子育て、戦争前後のことなどをお聞きした。

明治末生まれの方から、子ども時代を過ごした大正時代、まだ自動車が珍しかった頃停車中の車が動き出すところを見計らって後ろに待機しスタート直後の排気ガスを吸う遊びをしたという。小学校で『車の臭いかいだ』と自慢したそうである。今では考えられないことである。伯母からは昭和初期、学校の帰りに神田川で川遊びをしたことや魚釣り、草の実をとっておやつにしたことなど、お二人とも懐かしそうに4時間以上語ってくれた。その結果を元にヒアリング案を作成して実行委員会へ提示した。

ヒアリング内容が決定し、それぞれ担当する地域の委員会で実施することになった。親しい方からのヒアリングはお互いを知っているから出来たが、見知らぬ話者のヒアリングについてはどうなのか不安であった。

担当した香美郡へ出かけるため、筆者と同じマンション居住の室山さんに運転をお願いした。最初に野市町(現香南市)の川村さん宅を訪問した。室山さんから紹介して頂いた方の祖母が川村さんだった。そこから話に入っていった。近況について話す間はよかったが、ヒアリングに入ってから問題が生じた。互いの話す内容を理解できないのである。時代の壁がそこにあった。

2人の話を聞いていた室山さんが入ってきた。室山さんは昭和10年生まれである。2人の通訳をしてくれた。互いに話の内容を室山さんの解説つきで分かるようになり、ヒアリングが進んだ。この経験が、作成した本に注釈を入れることへと繋がっていった。

本来は女性だけで作成する中で、さらにあと2人のヒアリングの通訳をして下さった室山時男さんに感謝する。しかも、彼は香北町生まれだったので、ヒアリングで出てくる地名や慣習、出来事についても教えてもらうことが出来た。

今だから話せることである。通訳付きで話者にヒアリングをしたのは他にいないと思う。香美郡の会への送迎と通訳、本当にありがとう！

## ◆◇ 聞き書きにまつわるこぼれ話

高知市ブロック 大坪美代子

(この「女性史」が発行されて 1 年になります。昨秋には増刷されて、今販売されています。また、「耳で聴く女性史・CD」も今年1月に出来上がりました。)

「ソーレ」の古谷前館長の熱い思いに引っ張られて、「高知の女性史」の出版企画に参画させていただいたのが昨日のことに思い出されます。

平成 15 年から3年近い時間を経て出版に至ったこの一冊を初めて手にした時、そのずっしりとした手応えに思わず感動しました。

また、「第 16 回高知出版学術賞」の受賞もうれしいことでしたね。

確かに、この聞き取り、編集作業は大変なものでした。私が聞き取りに伺った 86 歳の女性は「ぜひ、お話しを聞かせてください」という申し入れに、『そんなことを言われても、あんた、一口に話せる人生じゃないぞね』と。80 余年の来し方を、特に、戦中戦後の混乱期を生き抜いてきた方にとって、それらの体験をどうして一口に話せることが出来ましょう。

日を改めて何度かお伺いし、お聞きしたことを 3,000 字にまとめ、さらにスペースの関係で 1,500 字への凝縮を余儀無くされ、話者のご了承を得ながらの苦しい工程でした。

実は、本の題名を決める際、数々の提案の中からこの時の言葉が取り上げられて決まったことは私にとって感慨深いものがあります。

私は二人の聞き取りをさせて頂きました。一人は『匿名希望』をどうしても譲らなかった母です。活字には出来なかったことも沢山ありますが、母の生き様を深く聴くことができました。今年 91 歳になりましたが元気でいてくれます。

最近、うれしい話を聞きました。市内の、ある老健施設でこの「女性史」を「デイサービス」や「入所」の方々に、「昔話」や「回想法」の一環として活用していただいているということです。読み聞かせをしているうちに『お年寄りの表情が変わってくるんですよ』ということを知りつつも、この一冊を出すことができ本当に良かったと思います。

さらに、新発売の「CD」も広く活用されて、女性の歴史を語り継いで欲しいと願っています。

## ◆◇ 聞き取りこぼれ話

高知市ブロック 野村ひとみ

「県外のデパートにも行ってねえ」と、誇らしげに日曜市のことを語る竹内美栄子さんの笑顔がいつまでも脳裏から離れません。

80歳をこえた話者の中には、本の出版を待たずにもう亡くなられた方もいらっしゃいますが、竹内さんもそのお一人である。

子育てのつらさもあったけれど、「タケノコ、ちょうだい」「あれっ、こんにちは。おばあちゃんはあ。」「元気になりゆうかねえ」など、なじみのお客さんとの会話や触れ合いが何よりも楽しみであった竹内さん。竹内さんのお店は今、お嫁さんやお孫さんが引き継ぎ守っている。

聞き取りを始める前には、実行委員のみんなの参考になればと、実行委員で聞き取り者でもある西山さんと二人で話し手と聞き手に分かれデモンストレーションをした。聞き取りはそのとおりにとはならなかったが、聞き取ることで話者のご家族に「私たちも知らなかったことがあったんですよ」「家族の中でも昔のことをおばあちゃんに聞いたりして一緒に話ができ本当によかった。ありがとうございました」と感謝を述べられたことは、聞き取り者として本望で嬉しかった。

今も昔も市民の台所日曜市。場所を変え形を変えながら店数を増やし成長してきた日曜市。しかし、その市も今過渡期を迎えている。顧客でもある市民のニーズや時代の変化に応じ、出店者にとってもお客さまにとってもまた市を取り巻く中心商店街にとってもいい「三方よしの市とは」を模索している。

時代時代で生きてきた道のりは違っていても、生活史に登場する話者の語った生き様は、今だからこそ、また今でなくては聞けなかったことや言葉が満載である。先人の貴重な言葉からその思いを次の世代にどう語り継いでいくか、私たちも模索しつつ、一人ひとりの今が問われている。

## ◆◇ やさしい気持ちにさせてくれた聞き取り

南国ブロック 山崎和子

聞き取りをする高齢者を紹介してくれたのは、お手伝いをしていた学童保育でお会いした浜田さんでした。浜田さんは私が退職前の仕事でも大変お世話になった方で、ソーレの活動にも参加していた。また、ブロックの取り組みでは、活動するメンバー探しで、紹介してくれた人から、次の人へ、また次の人へとメンバーが揃ってみると、中学校の先輩がいたり、同級生のお姉さんがいたりと思いきいぬ出合いがあり、ずいぶん助けてもらった。人と人はどこかでつながっていることを実感した、幸せな3年間であった。

聞き取りに伺った中村さんは、浜田さんの紹介ということで、快く受けてくださった。電話で道順を聞きお伺いした中村さん宅は、長男夫婦と同居の立派なお家で、恵まれた暮らしをされている様子であった。私の母より1才年上とは思えない若々しさである。お話はきびしい農作業、戦争中の空襲のおそろしさ、南海大地震、親の介護ときびしい内容である。3回訪問してお話を伺った。他人を責めたり、愚痴を言わず、にこやかに話してくれた。

今の若い人たちには「年上の人、お年寄りの話を素直に聞いてほしい」と言われた。

中村さんからお話を伺っているうちに、なぜか私の心の中に、もっと母親を大事にしなければとの思いが生まれてきた。親の話をじっくりと聞いたことがあっただろうかと反省した。聞き取りの一番の成果は、親に対する思いが深まったことかもしれない。私にこんなにもやさしい気持ちを持たせてくれたのは、中村さんのお人柄によるものと思う。ありがとうございました。







## 実行委員体験記Ⅱ

### 編集に携わって

#### ◆◇ 出たとこ勝負の崖っぷち

編集者・実行委員会副会長 坂本美和

出来上がった本をご覧になった皆さんから、「細かい作業で、編集もご苦労が多かったでしょ！」というようなお声をかけていただくことが結構あった。

したり顔で、「そうなんですよ。細かい作業ばかりでたいへんでした」と応えるべきかも知れないが、本来、編集作業というのはジトーツと臭いものなんだし、それを志して今日に至っているのだから、そういう自分が苦労でしたとは言えない。

記述を補う脚注をできるだけ詳しくつける。それが「本の良心というもの」とか、「ていねいな本づくり」というのは、できるだけ多くの皆さんに内容をより解りやすく伝える工夫をすることではないかとか、本づくりに対する理想が聞き取り者や話者の皆さんと共有できると実感できたときは、ほんとに嬉しかった。だから、きれい事でもなんでもなく、苦労の種は見つけられない。

編集のノウハウについて、これまた得意顔で持論をぶちたいところだが、人生の歩き方が行き当たりばったりで、仕事の仕方もこれに通じるということなのかも知れないが、諸事全般出たとこ勝負の崖っぷちで過ごしている。こんな毎日だから、残念ながらノウハウを蓄積する余裕がない。

それでも、「知ったかぶりをしない」ということにだけは気をつけて、少しでも解りづらい部分があれば遠慮なく聞き取り者にも、場合によっては話者の方にも質問させていただいた。おかげで「きちんと伝える」という点では、物分りの悪い自分の存在により、中学生にも親しみやすい表現になったのではないかと、これは密かに喜んでいる。

諸先輩方に教を乞うことで出来たつながりを干切ることなく今後を活かし、できることをコツコツ続けていきたいと思う。

## ◆◇ 年表作成に携わって

実行委員 佐藤ゆみ

「年表は佐藤さんお願いね」何回目かの実行委員会で松本瑛子先生から告げられ、まず頭に浮かんだことは(困ったことになったなあ…そんな大役私にできるのだろうか?…)ということである。もともと「高知の女性史の本を作ることになったので、お手伝いしてみませんか」と高知県立歴史民俗資料館前館長坂本正夫先生に言われ、校正等のお手伝いのつもりでソーレに足を運んだ私であった。

でも、他の皆さんはすでに聞き取り等で活動していらっしゃる。私だけが楽でいるわけにもいかない。まずは、松本先生から頂いたデータや既刊の年表など(外崎光広先生や大木基子先生の本を中心に)を参考に年を埋めていく作業にとりかかった。が、戦中戦後や近年のものはデータがなく、仕事の休みの日に自由民権館や高新に行き、当時の新聞をめくったり、マイクロフィルムを見たり、自由民権館の学芸員の方の貴重な独自データを頂いたり…これはこれで楽しかったし、貴重な体験が出来たと思う。

県や市の活動や県外の記事は、ソーレの前館長や二宮さんに助けて頂いてなんとか形になってきた。が、調べれば調べるほど、(こんな記事は必要ではないのでは?)とか、(もっと重要な記事が抜けているのではないか?)と不安は募るばかり…松本先生をはじめ、実行委員の方々に添削していただき、なんとか完成にこぎつけることができた。

今から思うと、平日は仕事と家事、休みの日は調査、夜は遅くまで打ち込み作業(この三年の間に長男の入院・手術もあり、一度は辞退したことも。)と、我ながらよく身体がもったものだと思う。

本の完成はもちろんだが、その過程においてのいろんな人々や本との出会いが、私にとっての一番の収穫である。

そしてこの本を手にして、「あの戦争さえなかったら…」という話者の方のお言葉がずっしりと私の心に響いた

## ◆◇ それぞれの語りから「生きる」ことを学ぶ

実行委員 玉里恵美子

とうとう高知県でも女性史が出版された。全国的に巻き起こった女性史ブームからみると、少し出遅れたかもしれない。しかし、他県の女性史に勝とも劣らない、素晴らしい女性史ができあがった。

『高知の女性の生活史ひとくちに話せる人生じゃあない』は、戦前から戦後を生き抜いて80歳を過ぎた、高知の女性90名が話者として「生活ぶり」を語り、これまた県内の女性90名が聞き手となって「ひとくち」にまとめた、画期的な女性史なのである。

明治・大正・昭和の激動期を生き抜いた人生の達人たちに、それぞれの結婚・子育て・仕事について語ってもらったところ、多くの語りの中に、戦争による夫や子どもの死、そして女性であるがゆえの理不尽な差別が生々しく描き出された。しかし、彼女たちが歩んできた道筋は茨の道でありながらも、よりよい家庭生活を求め、さらには、よりよい地域社会を作るために力強く生きる道でもあった。

話者が辛い思い出をしみじみ語る時、聞き手は共に涙したことであろう。話者が自分の活躍を熱く語る時、聞き手は拍手をすたさう。そして聞き手は、話者の生きざまを忠実にそして吟味して「ひとくち」にまとめ、何度も原稿を書き直したさう。だから、読者は90名の生活史それぞれから、深い悲しみや大きな喜びを受け取り、話者の生きざまに感動するのである。

終わりのなき国際紛争、親子や夫婦の殺人、青少年のいじめ自殺といったニュースが、毎日テレビや新聞で報道されている。「平和が一番」、「命は大切」とは言えても、生きるとは何なのか、生活を守るとは何なのか、自分の人生を全うするとは何なのか、誰も明確に答えてくれない。じっくり考えたくても、その余裕すらなくなっている。今こそ戦争や差別で傷つきながらも、しっかりと足を地につけて、激動期を必死に生き抜いた彼女たちの語りへ耳を傾けてみよう。答えは簡単にみつからないかもしれないが、生き抜くことの勇気や大切さ、家族への愛情、仕事への誇りは十分に伝わってくる。生きることの素晴らしさが、伝わってくる。

これからの時代を生きて行く私たちは、彼女たちの生きざまを真摯に学び、さらに次の世代へと語り継いでいくことを、彼女たちに誓わねばならないさう。



## 「高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない」はこうしてできた

(「文化高知」掲載文より)

「文化高知」は(財)高知市文化振興事業団から出ている隔月発行の冊子です。「高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない」が「第16回高知出版学術賞」を受賞したことから、その誕生のいきさつや編集過程を書く機会を与えられ、132号(2006年7月発行)から137号(2007年5月発行)まで、6回にわたって実行委員会のメンバー等が書き継いだものです。

### ～実行委員会三年間の記録抄～

古谷滋子

このたびは女性史の出版に対して、「第十六回高知出版学術賞」をいただき有難うございました。試行錯誤しながら出来た、二百五十余名の熱意の結晶が栄えある賞に認められたことは無上の喜びであります。また、「文化高知」の貴重なスペースをいただき、顛末記の連載をさせていただくことにも感謝を申し上げます。

連載〈 第一回 〉

◇始まりはこうだった～「知らぬが仏」

男女共同参画センター「ソーレ」の仕事に「調査・研究」があります。女性史を作れないかという漠然とした思いで佐藤基子高知短大教授をお訪ねしたのが平成十四年十一月。厳しいお話でした。高知の女性史の研究で出来ているのは自由民権ぐらい、女性グループが昔の新聞記事の収集を始めているが、戦災で高知新聞が消失しているなどで遅々として進まない。やるとすれば大変な時間とお金、組織力が要りますが、覚悟は？と聞かれて仰天。それに、頼みの佐藤先生は三月で東京に帰られ研究者もいなくなるという。一縷の望みは、「聞き取りなら貴重な資料にもなりましょう…」と。こりゃあどうも…という思いで引揚げてきました。

言いだしっぺの私は前言訂正も恥としない性格ですが、職員が止めようと言いません。さすがに私から言いだし難くて、将来、女性史が出来るときには貴重な証言として採用されるような聞き取り中心の物を作ろうと決めました。あの時やすやすと

諦めなかった職員に感謝です。

決まれば行動あるのみ。「女性史を考える意見交換会」で識者から様々な提案をいただきました。女性だけの実行委員会を作ることになり、委員の推薦もいただきました。県内全域から話を聞くために、県を七つのブロックに分け、まとめ役のブロック長も委員に入っていました。「これは大事な仕事やねえ」と真剣に考えて、大役を引受けてくださる十七人が決まった時には感激でした。そして「これで出来る！」と思いました。「人は力」です。委員のおひとりおひとりにそれぞれの役割を果たしていただいて、どなたを欠いても困る存在だったと今つくづく思います。

#### ◇ 実行委員会ができた～愛称は「ミモザ」

平成十五年七月に実行委員会が立ち上がりました。イタリアでは三月八日の国際女性デーに男性からミモザの花を贈ります。また、女性が初めてメーデーに参加した時にミモザの小枝を持ったことや「ソーレ」(イタリア語で太陽)の由来から、実行委員会を呼びやすく「ミモザ」としました。「男尊女卑の時代を生き、歴史の表に出ることのなかった母や祖母の時代を記録して男女平等を深く考える機会にしよう。出来るのは今しかない」という思いで、具体的には、三年計画で庶民の聞き取りを中心に高知特有の女性の姿を引き出し、最後まで興味を持って読んでもらえる、そして安価でコンパクトな女性史を目指しました。コンパクトではなく大判になったのは参加くださった皆様の思いが熱かったからですが、それ以外ではおおむね計画通りだったかなと自負をいたしております。

#### ◇ 聞き取りは百人から

ブロックではそれぞれに、あの手この手で十五人余の聞き取りボランティアをお願いしていきました。九十人の聞き手が決まった時「これで出来る！」と二度目の確信が持てました。それから後は皆様のやろうという熱い思いに背中を押されてきたように思います。「何で今女性史か」・「聞き取りのノウハウ」・「知っておきたい高齢者のこと」など、ブロックごとに研修を重ねながら、語り手は地域や職業が偏らないように、特別ではない当たり前前に生きてきた八十歳以上の女性百人を選んでゆきました。喧々諤々の議論をしながら。毎月ブロック会を開くところもありました。その時、県内には八十歳以上の女性が三二、六六〇人もおいでました。男性は一四、四一二人でした。

#### ◇ 編集も議論沸騰

どんな編集にするかも喧々の議論をしていました。委員会はずっと時間オーバー。文体は「あった・ある」調か、「です・ます」調か、数字は漢数字かアラビア数字か、ルビや注釈は、写真は等々。生活史か生活誌か、ということでも随分議論しました。一番悩んだのは字数の圧縮。申し訳なく思いながら多数の語りを入れる方を取らせていただきました。聞き書きを第一部として、五つの柱に(生活を支えた・自立へのこ

ころざし・結婚・戦禍をくぐる・子どもの頃) コラムも含めて九十二人の語りが入りました。第二部には「寄稿」をお願いしました。八十歳にこだわらずに、貴重な体験や女性史としてとどめておきたい事などを書いていただきました。十六人の方々が限られた三千字にエキスをこめて書いてくださいました。第三部に「高知の女性の近現代史」「年表～高知県の明治時代以降の女性史～」を入れました。硬くなりがちの部分ですが、自分達の身の回りであった出来事だけに親近感と興味が尽きません。これで「女性史」の体裁が整ったように感じました。更に、学術的価値を高めてくれたのが十四ページにもわたる索引です。高知大学の学生さんの協力をいただきました。

とうとうの決断を迫られたのが表題。“ひとくちに話せる人生じゃあない”と決めたのが入稿前の最後の実行委員会。語り手さんから出た言葉をいただきました。言い得て妙であります。

一番早くから決まっていたのが「表紙」、染織工芸作家山本眞壽さんの作品「ゆく日」。まさにぴったりの表紙と題に恵まれて「高知の女性の生活史」が輝きを増したと思えます。

#### ◇ 女性史はトラックに乗って

平成十七年十二月二十七日仕事納めの日、ソーレの玄関に二トントラックが横づけになり三千四百冊の本が届いた時は壮観で感激でした。千冊は小・中・高等学校などを中心に寄贈し、増し刷りも含めて三千四百冊をあっという間に売ってしまった作成協力者の皆様のパワーも忘れることができません。そしてまた、八十歳を超えた方々の語りから聞き手も元気をいただき、人が秘め持つ力の大きさに感じ入ったことでしたが、その力の繋がりや結集がまた、この一冊に凝縮したことを大変嬉しく思っております。

(ふるやしげこ／こうち男女共同参画センター「ソーレ」前館長)

## ～私たちの歴史を編む～

〈連載第2回〉

松本 瑛子

ソーレの事業として高知の女性史刊行のお話を古谷前館長からお伺いした時、「とても大切な事業だ」「ぜひ実現させて欲しい」「協力させていただきたい」と、外交辞令とジャパニーズスマイルでお応えした。それが実行委員会副委員長と「時代の概要・高知の女性の近現代史」執筆の任を負う羽目になり戸惑った。お役所仕事だもの、計画倒れもあろうし、あわてることないという思いは、官に対する私の誤解と曲解だったのだろうか。

高等学校の日本史の教科書に出てくる女性は男性の三パーセントでしかない。しかも鑑真やペリーら外国人の半分だ。それに、登場するのは卑弥呼や北条政子など権力者層の女性が主だ。文字を持たない庶民は記録を残すことが出来ないし、また普通の生活や当たり前のことは取立てて記録されないから歴史に残りにくい。しかし、高知には、山内一豊を功名に導いた妻千代の内助があり、お馬さんも「坊さんかんざし」のメロディーにのって全国に海外にも伝わっている。そして女性参政権を最初に主張した楠瀬喜多は日本の女性史に必ず出てくる。その他にも、はったか女性をたくさん輩出している高知ではないか。彼女たちの階層も活動も多岐だ。はったかさんを軸にしてみよう。とにかく動き出している、前向かなくては。私ってどこまで脳天気なのだろう。

先行研究調査のため、県史や市町村史に当たってみたが、女性は三パーセントどころかほとんど登場しない。「高知の女性史研究は自由民権ぐらい」とお聞きしていたが、前途多難が予測される。

近代史では新聞の資料的価値が高い。自由民権記念館のお世話になり、大正から昭和初期の新聞をめぐってみると、女性も取上げられている。勸業工場で働く女性、行軍の兵隊さんの接待をする婦人会、三面記事には興味津々、「昔もこんなことあったがじゃねえ」「こんな事で処罰されるがあ」と読み込んでいった。しかし変だぞ。昭和五年五月には治安維持法違反の一斉検挙があった筈だがその記事がない。百名ほど検挙され女性も含まれている筈だが、『高知県警察史』昭和編で確かめてみたが、一斉検挙の五回目に少し記述があるだけだ。そこで『高知県警察史』を刊行した県警本部を尋ねてみたが、どうも資料が残っていないらしい。『高知県社会運動史』で、一斉検挙から一年後に新聞掲載が出来、『土用新聞』が号外を出したことがわかった。戦時体制は早くから作られており、新聞統制も始まっており、事実が伝えられていないことがわかった。

『高知県統計書』が明治十三年から完全ではないが残されている。人口・産業はもとより、興味あるもので物価・就学・疾病・出産など各種統計が示されており高知県の姿

が一望できる。これらを並べて整理すれば、女性や社会が見えておもしろい。でも数字だけでは人の顔が見えにくい。固有名詞があってその周辺にも目をやり、時代を読み解いていきたい。

さて、高知の女性史で何を明らかにしたのか、柱立てをしてみようと考えた。植木枝盛は「男女同権ハ南海ノ某一隅ヨリ始ル」と述べたが、高知の女性は時代の節目には自由民権に立ち返り、そこから学ぼうとしてきた。自由民権を近代の出発点にしよう。次の大正時代になっても流行病が繰り返された。零歳児の死は年間死亡者の二割にのぼる。『愛知の女性史』で、明治二十五年生まれの「きんさん」は十一人の子を産み、五人を死なせ、「我が子が死んでも、泣いている暇があったら田んぼや畑に出て働け」と言われたと語っているが、高知でも同じようなことだったと思われる。たくさんの子を産み、死なせた。

八十歳以上の女性は、青春時代やそれぞれの女の時代を十五年も続いた戦争の中で過ごした。「高知の女性の生活史」のテーマとする聞き書を社会化させなければならない。戦場に夫を送った女性にとって、戦中こそ名誉の戦死として支援の声や手はあったが、戦後は遺族への風当たりが強く、好奇の目も周囲にあった。戦後の改革の享受にはほど遠かった。

一九四六年の総選挙で初めて女性が参政権を得た。この選挙で女性の投票率は予想以上に高かった。新しい時代を作ろうとする気概も高まってくると、家庭内や我が子だけでなく社会にも目を向けるようになり女性の活動の場が広がっていくのである。その一つ、母の会で、憲法に示された「義務教育はこれを無償とする」について疑問の声が起こり、やがて教科書無償要求運動となって、国会を動かし、教科書無償法案が可決されたのである。また男女の平等も、憲法に掲げられているから可なるものではない。労働の場における結婚退職や出産退職の強要に対し、一つ一つ裁判に訴えてその無効を証さなければならなかった。

表題の「女たちの歴史を編む」仕事は、どれだけその時代の女性の声が聞けるかということに懸っている。私は時代を行きつ戻りつする作業で、高知の女性一人ひとりを敬慕する気持ちに導かれた。その一人、小松ときさん（東京都在住・百歳）は反戦運動に身を投じ、治安維持法による一斉検挙を受け、高知署において拷問を伴った取り調べの後、赤岡署に移送された。そこで妊娠に気付いたがどうすることも出来ず、独房で空腹と戦いながら二百二十日の拘留が続いた。ところが私は高知署における拷問を書き落とし、記述に正確さを欠くことになり残念な気持ちと書くことの厳しさが身に滲みた。

高知の近現代女性史では、外崎光広氏のお仕事の大きさに感銘を受けた。高知の自由民権は士族民権だとされ、福島や埼玉の農民を主体にした運動には遠いように言われていたが、図書館に埋もれていた資料や新聞から農山間村々の運動や女性の活動を明らかにした。氏の著作『高知県婦人運動史』を随所で参考にさせていただいた。

(まつもとてるこ／高知の女性の生活史作成実行委員会副委員長)



## ～地域を歩いて聞き取りをして I～

〈連載第3回〉

筒井征子

「南国・香美に頼めそうな人だれかおらん？」

古谷館長からの電話。「女性史を考える意見交換会」を経て実行委員会を立ち上げるこ  
ととなり、人探しがスタートした。仕事仲間から頼めそうな人に押しの手で頼み込み  
「わたしでできることやったら」と了承をとりつけ、やっとほっとする。

やがて実行委員会が立ち上がり、いよいよ女性史作成への活動が開始された。県下を  
七ブロックに分けた中の、私は、土佐市・吾川郡の町村と仁淀村の担当となり、聞き取  
り調査をしてくれる人探しがまた始まった。

仕事を通じて知った方や昔からの友人で、物書きが好きそうな人、女性史に興味を持  
ってくれそうな人を思いめぐらし、電話で、また訪ねて行って趣旨を伝え、お願いに回  
った。聞き取り者もできるだけ多様な職種の人の方が人生経験も多様で、話者の話の中  
で感動する場面が異なるのではとの思いで人探しに当たった。

お願いに上がっても断られることもあり、困って仕事仲間を訪ね紹介をしてもらった  
り、また行政の女性対策の担当部署なら紹介してくれるかと、ソーレからの文書を持参  
してお願いに上がったが、「個人情報になるので人の紹介はできない」と断られ、残念な  
思いもした。

仕事がとても忙しい方に「もう頼む人がいないので嫌と言わず引き受けてや」と願  
いすると「その話、私とても興味がある。話を聞いてみたい人がいるので是非やらして」  
との返事。また一面識もない方が、電話一本で「私も聞き取りをしてもらおう年齢に近い  
けど、良かったらやらせてください」と引き受けてくださったり、いろいろありながら  
も、女性史に興味と関心のある方を期日までに探すことができ、聞き取り調査をスター  
トさせることができた。

聞き取りをお願いする時「聞き取ったことを書いてくれさえすれば後はソーレが対応  
してくれると思うから、お願い！」と頼んだのだが、実際に作業を始めると、これが大  
違い。一次調査をして、その中からさらに詳しく聞き取る場面をメンバーで話し合い、  
また聞き取りにお伺いする。文章に落としながら「ここは？」と思ったら再度お伺いす  
る。話者の了解を得てやっとの思いで提出したと思ったら、字数に限度があり、実行委  
員会で、この話者の思い入れの強い部分はどこか検討の末、また、聞き取り者に修正を  
お願いしなければならなくなる。車に乗れず、交通の不便な地域なので、三ヶ所に分か  
れて検討したり、全員で検討が必要な時は、一時間以上かけ、中心地に集まってもらっ  
たりと何回も何回も足を運び、ようやく完成に至った。聞き取る方、話してくださった  
方の思いと熱意で完成に漕ぎつけたと思っている。

三年間女性史作成にかかわったことで、すばらしい人生の先輩の話の聞いたこと  
に感謝するとともに、人との出会い、つながりの大切さを実感する機会となった。

(つついせいこ／吾川ブロック担当)

## ～地域を歩いて聞き取りをして II～

依光浩美

女性史作成のため、私は香美郡内の八十歳以上の女性四人の方にお会いし、お話をうかがった。

写真（※「文化高知」のこのページにはベットの中にいる島内幸さんと聞き取りをする岩井純子さんと依光さんの写真が掲載されている。）は、岩井純子さんと二人で島内幸さん宅を訪ねた時のもの。幸さんは、明治四十四年生まれの九十三歳だった。ここ数年は寝たきりということだったが、しっかりしておいでで、小さい頃のことなど、ハキハキと答えてくださった。

幸さん宅は、私の生家と同じ集落で若い頃の幸さんを私は知っている。コロコロと笑い声をたてながら楽しそうに話されるのは、ちっとも変わっていなかったのだが、一回目よりは二回目、二回目よりは三回目と、めっきり弱っていかれた。地主の家に生まれ、日本女子大で学ぶなど戦前は恵まれた生活を送っておられたが、戦後の生活は大変だったようだ。

聞き取りを終え、話をまとめた岩井さんは、幸さんの枕元でその文を読んで聞いていただいたそうだ。全部聞かれて幸さんは「ありがとうございます。光荣です」と言われたそうだ。

幸さんは、私たちが訪ねると大変喜ばれていろいろと話してくださったが、それは幸さんに限らず、他の方もそうだった。私は、自分の母から聞き取りをしたのだが、同じことを何回聞いてもいやがりもせずニコニコと答えてくれた。

「浩美はいつ来るろう。まだ話しちゃあせんことがあるけん」と、待ってくれることもあった。あれこれ聞くことで、昔のことをあらためて思い出したようだった。

島内幸さんと私の母島内亀代とは、近所同志で知り合いの間柄だった。戦前は、幸さんは地主、母は小作人だったが、戦後の農地改革は、二人に大きな生活の変化をもたらしている。幸さんは「太宰治の『斜陽』ですよ」と言われ、「もう、めちゃくちゃ」と言われた。母は、農地改革についてはこう言った。

「まっこと、あんなことをようしたもんやねえ」と。この大きな改革については、当時の母にとって、いや多くの人々にとって想像もできなかったことだったのだろう。戦後は価値観が大きく転換し生活も激変。物不足、金不足の中ほんとうに大変だったのだと、つくづく思った。そして、二人とも「戦争は、もう絶対せられん」と言い、そのことについては全く同じ思いだった。

親子として長い間生きてきたのに、私は、母の過去、母の思いなど、あまりにも知らなかったことに驚いた。母や祖母たちの歴史に耳を傾けることの大切さを感じた。聞き取りの中で聴いた生の声は印象深く、ひとこと、ひとことが私の心に残っている。

（よりみつひろみ／香美ブロック担当）

## ～地域を歩いて聞き取りをして III～

〈連載第4回〉

—語り部さんたちとのすばらしい出会い—

市川睦子

三年間の間には、訪問した時間の半分を笑いとおしゃべりで過ごした日もあった。また、ご主人との話に花が咲き「(女性史なのに)ご主人に換えようかしら」と冗談を言いあう事もあった。

ソーレでの作成実行委員会(愛称ミモザ)も軌道に乗り、並行して幡多ブロックの取材陣十二名も動き出した。語り部さんは郡内で偏りのないよう心掛けて選んでもらった。

私の担当の語り部さんには、辛い思いをさせた。退職後、体当たりで取り組んでいた、食生活改善の運動をしていた頃を語る時には、資料を山のように積み、メモを広げながら目を輝かせて説明してくれた。が、語ってほしい内容が実行委員会の調整により、第三の“政治家の夫……”に決定した時から、思案気に力なく微笑み、口数が少なくなっていた。そして「あの頃の苦労をあからさまに言う事は出来ない。主人にも響き、人様にも迷惑がかかり誤解を生む。私はどういう風に…、どこの辺りまで話してええもんか…」と呟いた。本当の苦労はなかなか話せるものではない。と言いながらも「今頃になって苦労した時代のことが、やっと、夫と話せるようになってきた。お互いに口にも出せなかった胸の内が静かに話せるようになってきた」と語った。私は彼女の澄み切った心中に頷き、未だに口に出す事すら出来ない苦労の数々を思って、文章の締め括りにこの言葉を使った。こここのところ少し体調を崩した彼女に、笑いのいっぱい詰まった八時間に及ぶ取材テープをプレゼントした。いつまでもお元気で過ごして頂きたいものである。

取材の仲間達も、語り部さんが、「花が咲いたから取りに来たや」等と電話を掛けてきてくれるとか、親戚のようになった等と話す。語り部さん達は、いつも快く家族で迎え入れて下さり、赤裸々に語って頂いた。感謝・感謝である。

どの語り部さんも、女性が軽視され、それぞれに重荷を背負った死に物狂いの時代を生きてきた。一人一人の生き様こそが時代を変える原動力だったのだと、完成した“女性史”に目を通して見て改めて思った。

“女性史”の本は親戚や知人に配られた。古希の祝いや入院見舞いにプレゼントするのだと買いに来てくれた人もいた。涙を拭きながら読んだという感想が、あっちこちから私の耳にも聞こえてくる。廻し読みをしているというグループも。その他にも、沢山の反響が届く。嬉しい限りである。

私達の仲間は、三年間の締め括りとして、解散式なるけじめの会を持った。その場で、解散するには惜しいとの声もあって、今“ミモザ幡多”のまま再スタートしようとしている。立派に出来上がった本を胸に抱き、それに参加する事が出来た満足感がそう言わせているのではないだろうかと思う。

語り部の皆様方から、崇高なる多くのものを学ばせて頂いた。活動の機会を与えて下

さった方々にも感謝をしている。

古谷前館長がわざわざ中村の公民館に来て下さり、話を伺った時には、あまりの突然さに、思わず警戒をしてしまった。その時の言動を思うと、今もって赤面の至りである。

文末になったが、取材時に教えて頂いた、環境にやさしい、廃油利用の“油粕”の作り方を皆様にもお裾分けしたいと思う。

- ① 米糠（ぬか）を大きめの容器に入れる
- ② 台所の廃油を入れ混ぜる（回数適当）
- ③ ボソボソ具合になったら出来上がり  
（いちかわむつこ／幡多ブロック担当）

## ～地域を歩いて聞き取りをしてIV～

—洗濯物をみると安心する—

堅田美穂

「八丁坂」を通学した子ども時代を語ってくださった春野さんの家は国道沿いにある。春野さんの家の前を車で通る時、家の様子をそれとなく見るのが私の習慣になっている。窓が開いていたり、戸が開け放してあったり洗濯物が干してあったりすると、家に居るのだ、今日も元気だなと思い安心する。

昨年の話だが、秋の夕方、農作業の服装で道路脇に立っている春野さんを見かけた。後になって「あの時は、何をしていたのです？」と尋ねると「たまねぎをうえよつたがよね」という返事。その時は驚いた。「今年は？」と聞くと、「最近は、足がばたつくのでよう植えちょらん。まだ、古い芽のでかかったがをお汁に入れて食べゆうぞネ。ハイカラな料理をするのがめんどうになって困ったもんよ。作るものいうたら煮物やら味噌汁よね。けんど健康診断では異常無しといわれたぞね。病院の先生には、味噌とジャコがあつたら上等言うちよいた」。そう言いながら笑った。

ご主人が出征した時から日記を書いているということだから、そこには六十年以上の生活が記録されていることになる。春野さんの昭和の歴史があり、平成も十九年を迎えようとしている。これからも日記が書きつづけられていくことを願いたい。

久しぶりに電話をすると喜んでいただいた。最初は低かった声が、だんだん張りのある元気で大きな声が変わってくる。世間話をしながら、声を聞きながら、誰かと話すことの大切さを考えてしまう。

語りコラム記事になっている春水さんのお宅は、国道からかなり入り込んでいます。したがってそこを通ることはめったにない。けれども、何かの用で通る時は、やはり洗濯物が干してあるか、人の気配があるか家の様子が気にかかる。春水さんの家を何回目に訪問した時、昼食会を友人たちとするというので、そのお宅へ行き飛び入りでご馳走になった。

「私らは、友だちどうし何かという集まって、話をしたり、歌ったり、講演を聞きに行ったり、旅行したり、料理を作って食べたりします。今日は〇〇さんの退院祝い」。

集まっているのは同じ集落の六人。最高齢の方は九十歳。食事をしながらの昔の話、現在の社会評、たくさんのお話を聞くことができた。私一人が聞くにはもったいない話ばかりであった。どの方にも、語りたいたくさんあるのだと思った。聞いておかねばならないことがたくさんあるように思った。

一人暮らしになっている高齢者は多い。でも、近くの者どうしが集まれる範囲で集まり、お互いに楽しめる時間を自分らで作り出せるのはなんと素敵なことか。その日以来、春水さんの友人宅にも洗濯物が干してあるかどうか気になるようになった。洗濯物が干してあるのは人がいる証拠だと思って。

(かたみほ／高岡ブロック担当)

## ～次次世代を巻き込んで～

〈連載第5回〉

上野智子

### ◇索引を作る

この本が多くの人・男、大人・子供たちに読まれることを渴望する、熱い感情と、さまざまな分野で引用されることをひそかに願う、冷静な感情とが、いつからか私の中に同居していた。そしていつしか、「読まれたい」「引用されたい」の双方をかなえるためには、この作業が不可欠であることをほとんど確信するようになった。それは索引作りである。

私の描いていた青写真は、「単語索引ではなく、事項索引に近く、しかもきめ細やかなもの」であった。

この種の本にはふつう索引は付かない。多くの人々の体験談が綴られ、話者・書き手の総数は優に百名を超えた。個性を尊重し、文体もあえて統一しないという約束での自由なスタイルの語り文の集積体に、さて、どのような索引を付ければよいか。

独自に立てた方針は三つある。

- ①女性に関わる事項を多く採る
- ②時代の理解を促す語句を採る
- ③高頻度の単語は連文節で採る

①は必然で、②は脚注にも反映するが、特色は③である。最近、私の専門分野（日本語学）では、読み手側の便宜に配慮した索引が多く見受けられるようになった。内容把握の指針となり、引用時の利用価値はきわめて高い。

索引作りは、すべての校正が完了した後、本文が確定しページが決まらなければ始められない。出版までの時日を睨みながら、時間との戦いになることが必至であり、私一人の力では到底できそうにない。日頃接している学生たちをこの渦に巻き込んでしまおうという想念が私の中に急浮上した。話者たちのことばを次次世代に伝える好機でもある。

二十三名の学生の協力のもとに、索引作りがスタートした。各人が分担した範囲の、まずは熟読から始まり、次に掲出語句の選択、さらに表計算ソフトを使った語句の入力と並べ替え、その結果をメールで私のところへ送り届けるまでの一連の作業をわずか三週間で終えた。大学が薦めてきた学生のパソコン必携の利点を最大限に活かした連携作業の美果と言える。

完成までにはさらに逆引き作業と本文との照合、五十音配列のチェックなど、煩雑な作業の繰り返しを余儀なくされたが、送信されたデータを私の手で短時間で一挙に集約する能力の効率化は、やはりIT時代の恩恵と言えるだろう。が、パソコンが完璧でないこともまた然りである。漢字の読みに悩んだり、五十音配列に迷ったり、まるで人

間ください。「こんなはずではなかったのに」と、出張先にまで携帯しての、連夜の点検作業が、今となっては懐かしい。

#### ◇索引を引く

では、その索引を引いてみる。例えば「戦争」は次のように出てくる。「戦争」で始まる部分のページが具体的な後続部分とともに列挙されている。「戦争が始まった」から「戦争を憎む」まで、十三カ所の記述が一覧できる。「戦争はいかん」「戦争はいやぞね」「戦争は絶対にいかん」から女たちの叫びが聞こえてくるようだ。「戦争」の一語に括る方法では、決して期待できない効果である。

次に、「女」を見てみよう。「女だといって」「女でも」「女のくせに」のこの部分だけでも、現代ではセクシャルハラスメントとして非難される。ましてや、「女に学問つけても灰すらも残らん」「女に勉強はいらん」「女の蓄えはいらん」は、次世代の女子学生たちには、信じられないような意図不明のことばに違いない。しかし、「女に生まれたのは不利だ」になると、次世代の私が、十代から二十代の頃抱いていた感覚そのもので、さほど違和感はない。

さらに「結婚」を見ると、出現箇所がずいぶん多い。第一部「聞き書き」は、「生活を支えた・自立へのころざし・結婚・戦禍をくぐる・子どもの頃」の五つに分かれ、その一つが「結婚」である。しかし、「戦争」や「女」のように後続部分のバリエーションには乏しい。なぜだろう。話者世代には、「結婚」は人生の一通過儀礼として淡々と受け止められていたからかもしれない。人口問題研究所は、一昨年六月の調査で一九八二年以来減り続けていた「いずれ結婚するつもり」の女性の割合が初めて上昇に転じたと発表した。また、「独身はよくない」「結婚に犠牲は当然」などが男女とも前回調査を上回り、「家族や結婚を支持する意識に復調がみられる」と分析する。「結婚」は索引全体で最も頻度の高い語である。対照的に「離婚」と再婚の頻度は低い。離婚率が高いと言われる高知県だが、時代の移りゆきであろうか、この本の記述からその傾向を読み取ることは難しい。

#### ◇索引を使う

「読まれる」「引用される」ための案内役を託した巻末の十四ページ。予想を上回る全二三五項が、和田書房の坂本美和さんによって、三段組みに収まった。装丁や本文はもちろん、脚注・索引など細部に至るまで、この本は、編集者の力量が発揮されたみごと仕上がりになっている。

索引を使って、これからどんな読み方ができるのだろうか。そのささやかな試みとして、索引作りにあたった学生たちが、現代の教育に繋がる問題の発見とその分析を行った。来年度は、はや平成生まれの若者が大学に入学する最初の年である。明治・大正生まれの女性たちの声が、昭和・平成生まれの人々にこれからも感動と刺激を与え続けるだろう。

もとをただせば、私と学生たちとの協同作業は、古谷滋子「ソーレ」前館長の深いご

理解なくしては実現しえなかった。索引に採る語句の選択もお願いしたところ、学生たちには採られなかった語句が少なからず含まれており、世代差をカバーすることができた。いよいよ印刷所へ入稿する前夜の、坂本さんとのファクスでのやりとり。そこには館長自ら詰めておられたこと。入稿当日は午前中まで、索引部分の電話での最終チェックに辛抱強く付き合ってくくださったこと。あわせて、学生たちの作業のために、人数分の大量の原稿コピーを作成し届けてくださった実行委員会事務局、二宮愛実さんのご尽力も忘れられない。これらはすべて、実行力を伴った理想家肌の土佐の女たちが、そのDNAを明治から大正・昭和の時代へと確実に継承してきたことの明らかな証しである。(うへのさとこ／高知女性の生活史作成実行委員会・高知大学人文学部人間文化学科教授)



## ～本が束ねた過去・現在そして未来～

〈連載第6回〉

西山壽万子

### ■ 耳で聴く女性史

当女性史は、刊行後、おかげで各方面から好意的に迎えられ、さまざまに用いられている。大学の講義のテキストとなり、また、市民の男女平等の歴史や人権・平和学習の教材ともなっている。中でも、朗読されることを通じて、思わぬ収穫がもたらされた。

口火を切ったのは、出版が成ったばかりの2006年1月、こうち男女共同参画センター「ソーレ」で行なわれた「ソーレまつり2006」での朗読であった。図書館の音訳を通じて障害者福祉に貢献している朗読サークル「あめんぼ朗読会」によって本の中の何編かが朗読されたのだった。なかなか感動的で、涙をふいていた観客もあったという。もともと、語り手の口述を活字にしたのが本書である。朗読は、素材を元の姿にもどして、より自然な形で伝わったのだろう。

そのときの朗読を聴いた「ミモザの会」（「高知の女性の生活史作成実行委員会」の愛称）のメンバーの何人かが、「これは音声化して広く届ける価値のあるテキストだ」と確信するに至った。本書の語り手たちと同時代を生きた高齢者に是非本書を読んで欲しいのにその多くが加齢によって目が弱り活字に親しみにくくなっていたため本の形ではすんなり届けにくいという課題が当初からあったのだが、この方法をとれば、同時にこれも解決できることになる。ということで、翌年度の「ソーレ・えいど」事業に応募して朗読版をつくることを決意したとのことだった。

「ソーレ・えいど」とは、男女共同参画に資する県民の企画を「ソーレ」が支援し、男女共同参画の社会づくりを推進する事業である。本書は女性の生活史を通して男尊女卑の時代や人権を踏みこむ戦争の庶民生活への影響を具体的に証言しており、そのCD化はこの事業の趣旨に合致すると思われた。誰がその事務に当たるかだが、三年間にわたる本書の編集期間中ずっと陣頭指揮をとってきた古谷滋子氏がその時ちょうど職業生活を終え自由に動ける身となっていたのはグッドタイミングだった。ミモザの会長今井清子氏は体調を崩していたので、副会長の松本瑛子氏をかたらって「ミモザ」メンバーに『「ソーレ・えいど」応募』についての同意を取り付け、CD作成事業に漕ぎだしたのだった。

### ■ ミモザ OB の会

とはいうものの、本が世に出た時点で「ミモザ」は使命を終え、グループは消滅したのだから「同意」もないのだが、三年の長きにわたってグループとして活動してきたのであってみれば、メンバーの気持ちの中ではすぐに消滅とはならないのであった。前の会と区別するために、今の会を「ミモザ OB の会」とでも呼べばいいのだろうか。前ミモザの会は「ソーレ」に召集され、「ソーレ」の肝いりで運営されていたのだが、今度の会は自主的なグループである。「ソーレ」の周りには幾多の女性グループがあるが、改めてその一つとして誕生し直し、そういうグループの一つとして「ソーレえいど」に応募したのだった。

た。

やがて「ソーレえいど」から適用決定のお墨付きをもらい、事業に取りかかったのが初夏。それからここに書くには煩雑に過ぎる長い過程を行きつ戻りつして、本に収録された90編の生活史の中から朗読に適した21編を選びだし、CDに載せることができたのはなんと翌年1月末の「ソーレまつり」当日ぎりぎりという、長い道のりだった。400部作った大半を県下の高齢者施設に寄贈し、残りは販売して普及を図った。

#### ■ コミュニケーションの媒体として

ある高齢者施設では、本書をコミュニケーションの媒体としてうまく活用していると聞いた。認知症のお年寄りに、「回想法」という昔を回想するセラピーが有効だとは聞いていた。本書などまるごと昔のことから成っているのだから、これを読み聞かせれば効を奏するのではと素人なりに思っていたのだが、認知症処遇に経験を積んだ施設長の発案でそれを実行している施設があった。この施設では、高齢者と若い介護職員とが本書を中において対話するのだという。

お年寄りに本書の読み聞かせを始めると、「自分の時はね」と得意そうに自身の昔語りを始めるといふ。その昔語りには若い職員は「なるほど」と耳を傾け「それで」と促すのだそう。そのコミュニケーションのために、この施設では各階に本書を備えてあるという。うれしい話ではないか。「世代間を埋めるコミュニケーションに苦慮していたが、この本はヒットです」とほめてもらえた。

また、こんな例もある。本書の聞き取りを実施した四万十市のボランティアメンバーが、お年寄り宅への訪問朗読会を計画しているという。一人暮らしのお年寄りのつれづれをなぐさめ、相談にも乗れるよう、介護保険等高齢者施策の学習も進めているのだそう。

各地で女性史は出版されているが、類書の多くは、採話されたまま図書館で眠っていることが多い。本書のように活用される例はまれである。県下に散らばる聞き取りボランティアの熱気がまださめやらずある、ということと、収録した話の一つひとつの生き生きとした魅力によるものであろう。全編に見え隠れする、南国の女性ならではの、向日性のバイタリティは素晴らしい。戦争によってこの上ない難儀を強いられた世代なのだが、泣いてばかりいられないと自分を頼み励まし自立への一歩を踏み出していく勇氣は読者を力づける。

#### ■ 読み継がれていく

本書作成委員の一人でもあり索引作成の煩をいとわなかった、高知大学の上野智子教授は、「のちの学生にも是非読ませたい」と、未来の学生のために研究室に本書をストックしているという。生活史素材・地域素材としてのユニークさを評価されたのだろう。

残念なこともある。聞き取りをさせてくれたあの方、寄稿をしてくれたこの方、と今指を折ってみるに、本書に笑顔の写真を残したまま他界した方々が、たちまち両手に余る。早い方は編集期間中に亡くなった。よくもまあ、亡くなる寸前に聞かせてもらったことである。ちょっと遅かったら永遠に失われていただろう生活史や大事な地域の歴史

を、沈む寸前にすくい上げることができたことに手を合わせたい。この事業を英断し、無事ゴールまで漕ぎ抜いた当時のソーレ関係者と、この企画に諸手をあげて賛成し、協力を惜しまなかった坂本正夫高知県歴史民族資料館館長(当時)に感謝する。

この本に関わった私たちすべてが、いずれはいなくなる。「記憶は一代、記録は末代」といわれるから、本が一冊でも世にある限り、細々とでも未来の読者に読み継がれていくだろうと信じている。いやいや、私たちがいなくなるその前になすべき仕事はまだまだありそうだ。「ミモザOBの会」は、今回の取り組みを契機に、男女がもっともっと幸せに生きることのできる男女共同参画社会実現に向けて、次の活動を準備しているところである。この会がお役御免になって解散する日は遠そうだ。

激動の昭和の時代、普通の女性たちが通ったいくつものでこぼこ道、日照りの道、ぬかるみ道のことを本書はこの先も語りやめないだろう。道中のほのかに明るい景色とともに。

(にしやますまこ／ 高知市ブロック担当)